

教育・保育現場におけるリスクマネジメント —リスクに対する認識を中心に—

松田広則 (児童学科・准教授)
田爪宏二 (子ども心理学科・准教授)
鈴木 樹 (教育学科・准教授)
伊東 潔 (セコム株式会社IS研究所)
高城義太郎 (鎌倉女子大学)

I. 研究の背景

2001年に発生した大阪教育大学附属池田小学校児童殺傷事件以後、学校への不審者侵入や子どもが被害者となる誘拐・殺人事件が頻発しており、教育・保育現場において外部からの不審者侵入の対策が講じられてきた。また、2006年に滋賀県長浜市において発生した友人の母親による2園児刺殺事件の例などのように、母親や同級生が加害者となる事件など、その内容も複雑・多様化してきている。このような社会状況のなか、教育・保育関係者や保護者の間で安全・安心に対する要求が高まっている。

また、交通事故、家庭内の事故、遊具や遊びに伴う事故(箱形ブランコ、回転ドア、水辺事故など)、理科・図工・家庭・体育などの教科における事故など、子どもの活動に伴う事故が頻発しており、この問題に対しても対策が望まれる。これらの背景のもと、2006年3月、小坂文部科学大臣は次期の学習指導要領に安全教育を盛り込むように指示している。また、厚生労働省においても21世紀の母子保健のビジョンを示すための「健やか親子21」推進協議会を設置し、子どもの事故防止に関する具体的な取り組みとして、「事故の大部分は予防可能である。子どもの発達段階に応じた具体的な事故防止方法に関して、家庭や施設関係者への情報提供、学習機会の提供等を行う」ことを掲げおり、子どもの事故防止が国民的な運動として展開されることが期待されている。これらの取り組みからもわかるように、安全教育は教育・保育における重要な課題である。

一般的に、子どもを取り巻く安全には、自分を取り巻いている環境を安全に保つための安全管理(リスク・マネジメント)と自分自身が危険を回避し安全な行動がとれるようにするための安全教育の2つの側面が考えられる。安全教育に関しては安全学習と安全指導があり、小学校教育の中では主として保健体育科(保健分野)で安全学習がおこなわれ、特別活動(学級活動、健康安全・体育的行事)を中心に安全指導がおこなわれている。同様に幼稚園、保育所における保育においても、事故を未然に防ぐために適切な配慮や対処をする安全管理と、子どもに対して安全な生活に必要な基本的習慣や態度を養う安全教育、指導が保育者等によりおこなわれている。

II. 研究目的

近年、子どもをめぐる社会環境、とくに安全に関わる様相が大きく変化してきている。現代において、あらゆる生活圏での子どもの安全性を高めるためには、子どもとの関わりの深い教師や保育者、親が危険を認識することや危険の対処法をより適切に考えることが必要となる。前述のように、これらの考え方にはおもに安全管理と安全教育という概念があり、子どもの安全対策としては両者ともに必要である。安全管理や安全教育に関する従来の研究においては、安全な生活環境を子どもに提供する、または大人が子どもの安全を管理、教育するというよう

に、子どもを取りまく環境や大人の援助のあり方について検討されたものが多い。しかしながら他方、主体である子どもの安全に対する認識、子どものもつ危機回避能力、緊急時における子どもの認知、行動の特徴については十分な検討がなされていない。

このような問題点を踏まえ、本研究は幼児期および児童期の安全対策の現状、および安全対策に関わる大人（親・保育者・教師）と子どものそれぞれの認識について調査し、より効果的な安全管理や安全教育をおこなうための資料を得ることを目的とする。なお、本研究は、子どもの運動生理学的視点、および環境認知に関する心理学的視点からのアプローチにより、この問題に対する知見を得るための基礎研究であり、このような研究を通して子どもの姿を明らかにしていくことは、より子どもの視点に立った環境構成や安全教育をおこなう上での示唆となりうるものであると考えられる。本稿においては、大人と子どもの認識差を理解するための予備調査として、子どもの遊びのなかにおいて、大人が認識していない遊び方や危険と感じる遊び方についての調査結果を報告する。

Ⅲ. 保育においてみられる子どもの「危ない遊具の使用」（予備調査）

予備調査として、保育現場において、子どもが遊具で遊ぶ際にみられる、大人が予想しない遊び方や、危ないと思われる遊びについて、幼稚園または保育所において実習を行った学生を対象にアンケートによる調査を行った。対象は、保育者を志望する短期大学生65名であり、調査は保育士資格に関連する講義の中で実施した。

1. 危ないと思われる遊び方の頻度（Table 1）

子どもの遊具の使い方、遊び方において、事故につながる要因になると考えられる行動を、「異なった使用法」、「高い、不安定な所での遊び」、「子ども同士の接触」、「無理な遊び方」の4つのカテゴリーに分け、Table 1に示す項目について、保育現場においてどの程度見かけたことがあるかを、「良くあった／時々あった／あまり無かった／全く無かった」の4件法で質問し、回答を求めた。その結果、「良くあった・時々あった」とする回答が60%を超え、高い頻度で観察された子どもの行動は、「通常とは異なる遊具の使い方をする（66.2%）」、「自分の身長よりも高いところに上る（83.1%）」、「自分の身長よりも高いところから飛び降りる（63.1%）」、「遊具の中で他の子どもにぶつかる（73.8%）」、「遊具の中で他の子どもを押してしまう（75.4%）」であり、高い場所、不安定な場所での遊びや、子ども同士の接触が多く見られていることが伺われた。

Table 1 危ないと思われる遊び方の頻度（括弧内は有効回答数に対する割合（%））

遊び方	良くあった	時々あった	あまり無かった	全く無かった	計 (有効回答数)	
異なった使用法	正しい使い方を理解せずに遊具で遊ぶ	2 (3.1)	10 (15.4)	48 (73.8)	5 (7.7)	65 (100.0)
	通常とは異なる遊具の使い方をする	6 (9.23)	37 (56.9)	18 (27.7)	4 (6.2)	65 (100.0)
高い、不安定な所での遊び	自分の身長よりも高いところに上る	24 (36.9)	30 (46.2)	8 (12.3)	3 (4.6)	65 (100.0)
	自分の身長よりも高いところから飛び降りる	17 (26.2)	24 (36.9)	15 (23.1)	9 (13.8)	65 (100.0)
	ボールやタイヤなどの上に乗る	11 (16.9)	22 (33.8)	22 (33.8)	10 (15.4)	65 (100.0)
子ども同士の接触	大型積み木や机などを積み重ねて上に乗る	14 (21.9)	20 (31.3)	18 (28.1)	12 (18.8)	64 (100.0)
	遊具の中で他の子どもにぶつかる	12 (18.5)	36 (55.4)	13 (20.0)	4 (6.2)	65 (100.0)
	遊具の中で他の子どもを押してしまう	15 (23.1)	34 (52.3)	15 (23.1)	1 (1.5)	65 (100.0)
無理な遊び方	自分の年齢よりも低い学年用の遊具で遊ぶ	6 (9.2)	27 (41.5)	25 (38.5)	7 (10.8)	65 (100.0)
	自分の年齢よりも高い学年用の遊具で遊ぶ	3 (4.7)	30 (46.9)	23 (35.9)	8 (12.5)	64 (100.0)
	遊具に力を加えすぎる	4 (6.2)	21 (32.3)	31 (47.7)	9 (13.8)	65 (100.0)
	遊具の定員をオーバーして使っている	6 (9.2)	26 (40.0)	22 (33.8)	11 (16.9)	65 (100.0)

2. 危ないと思われる遊びの種類 (Table 2, 3)

保育において見かけた子どもの遊びの中で、遊具の使い方で危なかった（または危ないと思った）ことや、予想とは異なる遊具の使い方をしていたことについて、自由記述で回答を求めた。その結果、ジャングルジムやすべり台、雲梯など、屋外の大型遊具を中心に意見が挙げられており、特に、高い場所や不安定な場に登ったり、飛び降りたりする行動が、危険であると捉えられている。自分の身長よりも高い所に登り、飛び降りる行動は、子どもの運動遊びの中でもスリルを楽しむことができるものであるが、転落したり、着地に失敗したり、といった危険を伴うものである。また、ブランコ、ジャングルグローブ、回旋塔など、大きな動きを伴う遊具において、周囲の子どもとの接触の危険が指摘されている。Table 3には、このような遊びにおける事例のみられた学年を示した。ここから、多くの事例が年中児及び年長児において観察されており、年齢が上がり、身体を大きく使った活動が活発になるほど、危ないと思われる遊びも増加することが伺われる。

Table 2 遊具の使い方で危なかったことや、予想とは異なる遊具の使い方をしていたこと

遊具	遊び方
ジャングルジム	上から飛び降りる／上に登って木の葉を取る／縄跳びを結んで回す／手を使わないで登る
雲梯	下に人が通り足がぶつかる／支柱を鉄棒のようにする／足をひっかけてぶら下がる／上を歩く／上ででんぐり返し／上から飛び降りる
車の遊具	四つん這いに乗って走らせる
三輪車	スピードを上げて急に曲がる
シーソー	大勢で乗る
滑り台	頭から滑る／下から上へ上る／上と下でボールを転がしたり、投げたりする／支柱で上に上る
タイヤ	上に乗って歩く／トランポリンのようにしてはねる
鉄棒	片手でぶら下がる／手を離す／鉄棒をしている子の近くに寄る
登り棒	上にぶら下がって飛び降りる／タイヤをトランポリンにして反動で登る
ブランコ	乗っていたブランコに近づいてぶつかる／ロープをねじって乗る／立ちこぎ／支柱によじ登り、飛び降りる
ジャングルグローブ	きちんと乗っていない子がいるのに回しだす
回旋塔	横に大きく揺らす。まわりの子どもにぶつかりそうになる
大型積み木	積み上げて、上から飛び降りる
階段	手すりに上る／上の段から飛び降りる

Table 3 危ない、予想とは異なる遊具の使い方がみられた学年

質問項目	(括弧内は回答者数(65名)に対する割合(%))			
	年長	年中	年少	乳児
遊具の使い方で危ないと思ったこと	33 (50.8)	28 (43.1)	9 (13.8)	2 (3.1)
予想とは異なる遊具の使い方をしていた	25 (38.5)	29 (44.6)	11 (16.9)	4 (6.2)

以上、子どもの行動に対する危険に関する大人の認識を調べるため、実習生を調査した結果では、大人の予期せぬ子どもの利用方法での遊び、活動場所として高所もしくは不安定な場所、そして多くの活動量によって危険と感じる割合が高くなる傾向にあることが示唆された。今後、調査対象者を保育現場の保育者および保護者に拡大していくとともに、これらのデータをもとに子どもの遊びなどにおける実際の行動に焦点を当てて観察を行い、子どもの遊びにおける行動の実態と安全性について検討する。

本研究は、鎌倉女子大学学術研究所助成研究「教育・保育現場におけるリスクマネジメント－リスクに対する認識を中心に－」の平成19年度中間報告である。

IV. 参考文献

- 森 健, 岩崎大輔, 子川 智: 子どもの安全ハンドブック, 山と溪谷社 (2006)
- 荻須隆雄, 福田武比古ら: 保育所における事故防止・安全保育 ―特別保育実践講座―, 社会福祉法人日本保育協会 (2003)
- 荻須隆雄, 齋藤 歎能: 子どもの事故と安全教育 ―生活のなかに潜む危険―, 玉川大学出版部 (1997)
- (社) 土木学会巨大地震災害への対応検討特別委員会: 地震なんかには負けない! 幼稚園・保育園・家庭防災ハンドブック, 学習研究社 (2006)
- 内田伸子: 幼児の安全教育に関する総合的研究 ―幼児の危険認識の発達に及ぼす社会・文化的要因の影響―, 財団法人セコム科学技術振興財団研究助成平成17年度研究成果報告書 (2006)